

## 圖按法概要

比奈地畔川

### 〔五〕圖按の應用と智識(承前)

今や洋畫の新趣味は一般の裝飾品に輸入され應用せられて來た、殊に美術界に於ける此趣味は横溢として潮の如くに打寄せて其勢はすさまじい、けれども明治の美術界は未だ過渡時代にあると言はればならぬ、一般の趣味は和洋混亂して一の統一がない、特徴がない、反復と模倣と混成とによつて形作られて居る、これで明治の美術が形作られたとすると情けない、思ふに、時流におぼれ西歐の糟粕を嘗めてつまらぬものを作るより、自家個有の善美なるものを根柢として作らなくてはならぬ、けれども今云ふ處の自家個有の物を作るといふは材料や手段を云ふのでない、材料は油繪具でもフレスコでも水彩繪具でも何を用いてもよい道理である、要は個有の趣味特徴を發揮しなくてはならないといふのである、アールヌーボー式が佛國に起るとすぐとアールヌーボー式を模倣する、如何なるものでもアールヌーボー式でなくてはならぬといふことになる、近頃またゼツセクション式が流行しだした、今に一から十までゼツセクション式でなくてはならぬやうになるかもしれない、けれどもかゝる模倣時代を通り過ぎて、一ツの特徴あるものが出る來る時代が來る、明治も今にそのやうな時が來る、すべての藝術はさういふ順序を追ふてゆくのである、試みに奈良朝の盛時を顧みても、その初めは一般の文物が一も二も支那流三韓流でなくてはならなかつたのである、それを模倣し反復し混和した最後に、初めて脱化された奈良朝式のものが出來たのである、實にその時が望ましい、縮緬の紋付へ鳥の毛のシヨールを纏ふて得々たる時代も永くはあるまいと思はれる。さて、圖按は智識よりも技能、或は技能よりも想のものであるといふてよいかもしれない、一體説明によつて技能家を作るといふことは無理な話である、けれども今圖按家は何を心得てよいかといふことだけの質問に答へるである。

まづ圖按を學ぶ方法として一定の準備と用意に付ては

第一、何物も畫き表はすことの自由なるべきこと。

第二、然も形を正しく且つ觀察の精細なるべきこと。

第三、熟練。

第四、考證。

以上の件を具體的に説明すると

第一、一色畫の研究。一般の形體を寫生する手腕の養成としてはこれに如くものはない、一名デッサンの素養を作ることなり、前項にも述べし通り、石膏人體の寫生、解剖の研究がすべての基礎となる、修業年限は限りなし、少くとも數ヶ年以上。

第二、用器畫法、幾何畫法の素養知識を嚴正にすること。

第三、自然一般の研究、殊に動植物は圖按の資料として最も必要なるもの故、精細なる觀察寫生解剖を研究し、是と同時に色彩陰影の研究。

殊に植物のプロホーション、其生長の主要點研究は圖按を學ぶもの、決して忘るべからざる處のもの。

第四、消極的の方面からは有職故實、一般文學、審美學、東西美術史、古代の遺品裝飾品、各國各代の器具調度、古今風俗の變遷等、之等によつて見聞知識を啓發し、間接の利益を得ることは多大であらう。

熟練といふことは勉強と時間の上の問題であるから説明の限りでない、今二三項圖按家の心得べきことは、

第一、時勢の變遷によつて形の自然に廢れるもの、或は便不便によつて形狀の推移してゆくもの。

第二、用途上期節の相違、人類の嗜好習慣の相違によつて趣味嗜好を見極むること。

第三、關係を持つ處の周圍の事情によりて圖按そのものを損傷されざる様留意すること。

尙細目に涉つて言ふことはあるけれども、追々項を改めて説明することとする、何れも自己が智識と經驗と技能とによつて立派なものを作り得るやうになるのであらう。

それから、今一つ前人の作を借りて以て斟酌し折衷して一圖按を得る場合もあるけれども、これは剽竊でなければ模擬、模擬でなければ不調和などに陥つて、其目的を達することが六ヶ敷い、三越の元祿模様、白木屋の芦手模様などをみても思ひ半ばに過ぎるものがある、具眼者のなすべきことではなからう。(禁駢載)

## イースト氏寫生談

印象派(承前)

石川欽一郎

筆致に於ても其間に自から遠近の別あるべし、例へば最遠景の空や景色は筆法前景の如くに粗剛なる可からず、遠景の空は常に滑かなる感じを覺へ、漸く中天に至るに従ひ變化を生ずべし、景色も亦同じく、遠景は前景よりも其素質滑らかに思はるゝものにして、之れが變化を與ふる時は能く遠近の趣を現はすに至るべし、畫家は物體の遠近法を多少心得置くの要あるは勿論なれども、風景畫に於ては目に見ゆる物體よりも目に見えざる色彩の遠近法こそ大に研究の要あるものなれ、地面は概して平坦なるものにして見下ろしたる如き縦面のものは無く、又た地上の物體が漸々縮少するのみを以て之れが遠近を現はす可きにあらず、自然の裡には一本の線あり、此線は目には見えざともそう感ずるものにして、即ち遠景の山の麓の線之れなり、野も畑も皆此線に伴ふ如く見へ、何物も皆此想定線上に横はり、又た如何なる風景畫にても此線は皆強く且確實に感ずるものなり、風景畫家は物體が遠方に至れば其形が縮少すると共に、之に及ばず空氣の關係をも能く研究し、色彩の濃淡強弱に誤りなくして且つ空氣の色の遠近にも能く叶ふやう爲さ